

都市でひとりになる居場所の本質に関する研究 -都心キャンパスに通う大学生を対象として-

1X17D082-0 宮本知佳*

都市生活を送るうえで日常生活や普段の社会的な関係性を取り払ってリラックスした気分になったり本来の自分らしさを取り戻すことができるような居場所が必要とされている。このような居場所のうち、本研究ではひとりになることで居場所を感じることができる屋外の場所を「都市でひとりになる居場所」と定義し、その特徴を把握した。また、都市でひとりになる居場所において他者及び非日常を感じることが主体に対して持つ意味としてそれぞれ3つの意味があることが明らかになった。

Key Words : ひとり, 居場所, 他者, 非日常, 屋外空間, 本質観取

1. 序論

(1) 研究の背景

日常生活を送るうえで、一時的に仕事や学校での自分の役割から解放されて、リラックスしたり落ち着きたいというような経験は多くの人に共感されるものであろう。このような時に過ごす場所として所謂「居場所」というものがある。藤竹¹⁾によれば、「居場所」という言葉は1990年代以降になって、「人が居る場所」という意味だけでなく、「本来の自分らしく居ることができる場所」というような意味を持つ言葉として使われるようになった。また、石本²⁾によれば、多くの居場所に関する研究で、他者と関わることが重要な居場所とひとりになることが重要な居場所という分類がなされている。

他者と関わることが重要な居場所の一例としては日本の居酒屋文化やサークル活動など、趣味の活動を通じた場が考えられる。Oldenburg³⁾により提唱されたサードプレイスもまた、普段の社会的地位や役割を取り払い、そこに居る人が全員対等な者として会話をすることで交流を深めるような場所であり、居場所に近いものと考えられる。

ひとりになることが重要な意味を持つ居場所の一例としては、造園家であったマギー・K・ジェンクス氏により立ち上げられたがん患者とその家族のためのマギーズセンター⁴⁾や、ひとりカラオケなどの「ひとりビジネス」が近いものと考えられる。マギーズセンターではがん患者及びその家族は周囲の人や普段のことを気にすることなく、思う存分に自分の感情をあらわにすることができる。また、「ひとりビジネス」の空間に居る時は、一緒にいる人への気兼ねなく好きな事をしたり、考え事をしたりする事が出来る。これらが必要とされている背景には他者の目から離れた場所で自分らしさを取り戻すことへの需要が伺える。

居場所やサードプレイスに関する既存の研究としては林田ら⁵⁾のように、「居心地の良い場所」として各個人によって構築されている場所の把握及びその利用特性や属性による違い等に関することが多い。一方で、その空間体験の質的な評価を対象とした研究は心理学分野も含めて行われているものの十分とは言えない。特に都市の中でひとりになることが重要な居場所を対象とし、そこでの質的な受け止め方に注目した研究は管見では見出せない。

(2) 研究の目的

本研究では、都市の屋外で知人と一緒に過ごすわけではなくひとりになってぼーっと過ごす場所や普段の生活や社会的な役割から解放されているような気分になってリラックスできるような場所を「都市でひとりになる居場所」と定義し、その特徴を把握した後に、フッサール現象学に基づいた本質観取の方法を参照してそのような場所における主体の心情に着目することで、都市でひとりになる居場所が主体に対して持つ意味を明らかにすることを目的とする。

2. 既存研究の整理

(1) 本研究に関連する既存概念の整理

本研究において都市でひとりになる居場所を定義し扱うにあたり、関連する概念について整理を行う。

a) 居場所

居場所に対して明確な定義はされていないものの、藤竹¹⁾による自分らしく振舞えたる場所や仲間に認められていると感じられるような場所という意味付けが一般的であると考えられる。人との関わりが重要な意味を持つ社会的居場所²⁾、社会的な関係性を取り払い、本来の自分らしさを実感できるような人間的居場所¹⁾、ひとりになることが重要な個人的居場所²⁾等の分類がなされている。

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

b) サードプレイス

サードプレイスは Oldenburg³⁾により提唱された概念であり、そこでは普段の社会的な地位や関係性を取り払って、皆対等な者として振舞い、主に会話によって人間関係を築いていく。また、Oldenburgはサードプレイスの真価を、普段の生活やストレスからの逃避よりも、その場で得られる人間関係や経験にあるとしている。

c) プライベート空間

プライベート空間とは泊ら⁶⁾によって定義された概念であり、他者からの目を気にせずに自由に振舞うことが出来る自分固有の時間や空間を指す。またその機能として、緊張解消、課題への集中、自己内省、率直なコミュニケーション、気分転換、情緒的解放、自己変身の7機能があるとしている。

d) 回復環境

高山ら⁷⁾によれば、回復環境とは単にストレス源が無いというだけではなく、精神的な回復を促すような環境の事を指す。また、このような回復環境の特徴として逃避、魅了、広がり、環境と人間の行動の適合という4点があると明らかになっている。

e) ひとり空間

ひとり空間は南後⁸⁾によって提唱された概念であり、一定時間ひとりという状態が確保された空間における人とその空間の関係性に着目した概念であり、どちらか一方を指すわけではない。

f) 都市でひとりになる居場所の位置づけ

本研究で扱う都市でひとりになる居場所の既存概念に対する位置づけは、その場所の機能という観点では、社会性を取り払って自分らしく居る事が出来る人間的居場所や、プライベート空間の機能のうち気分転換・情緒的解放・緊張緩和、及び回復環境に近い。また、その場での他者との関係性という観点では、ひとりになることが重要な意味を持つ個人的居場所やプライベート空間及びひとり空間に近いと考えられる。

(2) 既存研究の整理

本研究に関連する既存研究として a) 居場所等の機能に関する研究、b) 居場所等の場所の選定に関する研究、c) 屋外空間における人の行動に関する研究、d) 「ひとり」の研究が挙げられる。以下にこれらの分野の既存研究の概要及び整理と本研究の位置づけを示す。

a) 居場所等の機能に関する研究

その居場所と一緒にいる人との関係性と居場所の機能の対応を明らかにした研究²⁾、特定の感情状態の時に必要とされるプライベート空間の機能の研究⁶⁾が行われている。

b) 居場所等の場所の選定に関する研究

居場所として被験者に選ばれている場所及びそこでの具体的な行動を明らかにした研究⁵⁾⁹⁾¹⁰⁾、居場所としての居心地良さとそのためのしつらえを明らかにした研究¹¹⁾、ストレスからの回避のために回

復環境として選ばれる場所とストレスの関連性を明らかにした研究¹²⁾がある。

c) 屋外空間における人の行動に関する研究

特定のフィールドでの調査より居場所における人同士及び人と環境の関わりから居場所としての特徴を明らかにした研究¹³⁾、パブリックスペース設計の際に意図された人の行動から人間-環境関係の12分類を得た研究¹⁴⁾、フィールドでの調査から公園に求められるニーズを明らかにした研究¹⁵⁾が挙げられる。また、鈴木¹⁶⁾はある場所に居ることが出来るという事自体がその場所の主要な価値の一つであるとして、人がそこでどのように過ごすかという観点からの屋外空間デザインの可能性を示唆している。

d) 「ひとり」の研究

他者との関係性から離れ一時的にひとりになることの価値を明らかにした研究⁸⁾¹⁷⁾がある。

(3) 本研究の位置づけ

以上の既存研究では居場所等の役割やその具体的な場所、及び屋外にひとりで居る人がどのように過ごしているのかという点では明らかになっている部分が多い。一方で、居場所等に居る時の主体の心的な変化やその要因についての研究は十分とはいえない状況にある。本研究では都市でひとりになる居場所が主体にとってどのような意味を持つのかという点に着目する点に特徴がある。

(4) 研究の流れ

研究の構成を図-1に示す。まず、都市の中でひとりになる場面の事例を収集した主体の心情によって分類し、どのような時にひとりを感じるのかという現状を把握する。次いで都市でひとりになる居場所の事例を収集し、そこに居心地の良さを感じる理由について、主体と他者及び環境との関係性という観点から分析を行う。最後に都市でひとりになる居場所の居心地の良さに影響すると考えられる「都市で出会う見知らぬ他者」及び「都市で感じる非日常」について、これらを感じる事が主体にとって持つ意味を、フッサール現象学の本質観取を参照したグループインタビューによって明らかにする。

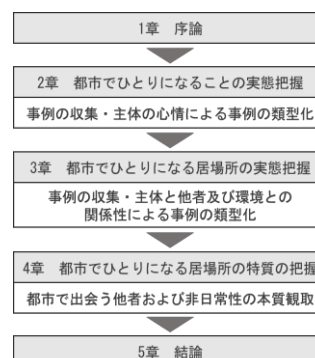


図-1 本研究の構成

表-1 グループインタビュー調査概要

日時	2020.10.2 13:30-15:30 2020.10.16 13:30-15:00 2020.10.29 11:00-12:30
被験者	景観・デザイン研究室の学生6名(2020.10.2) 景観・デザイン研究室の学生3名(2020.10.16) 景観デザイン研究室以外の社会環境工学科の学生5名(2020.10.29)
方法	参加者に「都市にひとりでいて居心地の良さや楽しさを感じた経験」「居心地が良かった事に限らずひとりになった経験」について場所の詳細、そこでする事、心情の詳細とその理由として考えられる事を尋ねる。また、「都市にひとりでいる人を見た時に思う事」について具体的なエピソードとともに説明してもらう。

表-2 テキスト分析の例

元の発言	私は公園でひとりで過ごことがあります。なんか、一人で過ごしている人が他にいるような場所だった結構一人で座って、例えば今じゃないけど、前はバイトの休み時間とか1時間とかあったんで、その間に近くの公園に行ってお昼ご飯を食べたり、何かしながら座っているみたいな感じで、そういう時に選ぶ公園は、だれもない公園でも嫌だし、なんか友達同士ばかりでも居心地悪いし、一人で居ても大丈夫そうだっていう公園を選んでいて、その時の気持ちは、まあでも周りのその、緑とか？公園の緑とか人のワイワイしている感じとかを何となく居心地がいいなって思う気持ち？そんな感じでひとりで過ごすかなっていう。(じゃあ結構周囲の環境、周りに人がどんな感じで居るかとか、結構一人で居る時の居心地にとって大事って感じ？)大事って感じ。で、何か一人で居る事が目立つような場所だと、すごい、何か周りの目を気にするっていうか、実際、「自分しか一人じゃない」って思うと、アッ、って思っただけで帰るみたいな感じだけど、周りにもそういう人が居ると、なんと無く一人で居るみたいなのはあるかなっていう。
場所	公園のベンチ
する事	一人で座って/一人で居るような公園で座って、何かしながら座っているみたいな感じ
心情	何となく居心地がいいなって思う気持ち
心情のきっかけ	だれもない公園でも嫌だし/友達同士ばかりでも居心地悪いし/一人で居ても大丈夫そうだっていう公園/緑とか？公園の緑とか人のワイワイしている感じとか/何か一人で居る事が目立つような場所だと、すごい、何か周りの目を気にする/周りにもそういう人が居ると、なんと無く一人で居るみたいなのはあるかな
エピソード	一人で過ごしている人が他にいるような公園で座って、何かしながら公園の緑や他者の賑わいを見ている時、何となく居心地の良さを感じる。

(5) 調査方法について

本研究では主体の心情といった主観的なものを扱う為、各自の体験談に即した自己内省が必要であり、被験者同士の相互作用により自己内省が深まること及び経験が思い出され言語化されることを想定して、グループインタビューを実施した。また、「都市で感じる見知らぬ他者」及び「都市で感じる非日常性」を感じるものの主体にとっての意味については、価値や心情といった主観的なものについてその本質を明らかにする際に用いられることがある、フッサール現象学に基づいた本質観取¹⁸⁾を参考にグループインタビューを行う。

3. 都市にひとりでいる場面の実態把握

(1) グループインタビュー調査の概要

本研究において都市でひとりになる居場所を扱う前段階として、普段の生活の中で、都市にいてひとりを感じる場面としてどのようなものがありその時の心情はどのようなものであるのかという実態を把握する為に事例として体験談をグループインタビューによって収集する。この調査の概要を表-1に示す。

(2) データの整理

全てのインタビューは録音し、会話を書き起こしてテキストデータとした。テキストデータからは、

表-3 抽出された心情の分類(ポジティブ)

大分類	心情	具体的なエピソードの例	心情のきっかけ	きっかけの要因
ポジティブ	安心感	川沿いを走っている時、他者の存在を目にして一人ではない安心感を感じる。 精神的な打撃の後に街を無目的に歩いている時、他者の存在を感じる事で安心出来た。	他者の存在への意識	他者
	集中	カフェや学校のラウンジは周囲に他者が居る事で課題に集中することができる。	他者と自己の比較	
	優越感	喫茶店で課題をする時、周囲の他者と比較して難しいことをしている自分がかっこいいと思う。	他者を見ること	
	楽しさ	セントラルパークで多様な他者のアクティビティを見るのが楽しかった。	他者か周囲に居ない事	他者以外の環境
	解放感	湖の人が少ない河原でランニングしている時周囲の視線や他者を気にせずに居られた。		
	楽しさ	夜中の住宅街を散歩している時、探検しているような楽しさを感じた。 街を歩いている時、知らない世界を見ている感じがして楽しい。		
	自己内省	駅から自宅までの緑道を歩くとき考え事をしながらリフレッシュする。		
	休息	東京駅の駅前広場のベンチに座って人が動いているのを見ながらぼーっとする。 電車内で何もせずぼーっとしている。	他者+環境	

表-4 抽出された心情の分類(ネガティブ)

大分類	心情	具体的なエピソードの例	心情のきっかけ	きっかけの要因
ネガティブ	不快感	公園に居る時周囲からひとりで寂しそうと見られているのではないかと感じてゆくりできない。	他者の存在	他者
	疎外感	知らない土地のお祭りに参加した時周りが知り合い同士ばかりで疎外感を感じた。 友達同士の人が多い場所にひとりで居るのは気まずい。	他者の存在	
	気味悪さ	夜の路地裏に完全に自分ひとりで居るのは不気味な感じがする。	他者の不在	他者の不在
	孤独感	きれいな風景を見た時に感動を共有できない。 友人と遊んで別れた後ひとりになると寂しい。	他者の不在	

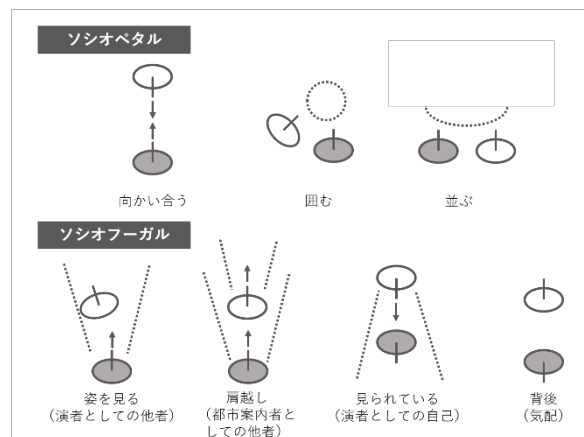


図-2 他者との関係性に着目した居方のタイプ
(文献¹⁹⁾より作成)

都市でひとりになる個々の場面について、場所、する事、心情、心情の変化のきっかけ、心情の説明を抽出し、エピソードとして整理した。この抽出方法の例を表-2に示す。また、抽出された心情を分類した結果を表-3、表-4に示す。

抽出されたポジティブな心情を表-3に示す。心情を引き起こす要因である心情のきっかけの要因としては他者及び他者以外の環境の2つに大別され、更に他者に対してどの様に意識を向けるか、及び他者のどのような点に意識を向けるかという点から、心情のきっかけとして他者に関係あるものは「他者の存在への意識」等の4つに分けられた。

抽出されたネガティブな心情を表-4に示す。本調査で得られたデータのうち、ネガティブな心情のきっかけ及びその要因が他者以外の環境となるものは無くすべて他者に関係しており、特に他者の存在及び不在が強く意識されていた。

表-5 ひとりで居る時の心情と他者に関係する居方の対応

大分類	心情	他者と自己の位置関係	当てはまるソシオベタルの居方	当てはまるソシオフィーガルの居方
ポジティブ	安心感	他者に自己が見られて いるような配置	-	見られている（演者としての自分） 背後（気配）
	集中	自己が他者を眺め、 比較する事が出来る ような配置	向かい合う 囲む 並ぶ	姿を見る（演者としての他者）
	優越感	自己が他者を眺め、 比較する事が出来る ような配置	-	姿を見る（演者としての他者）
	楽しさ	自己が他者を眺める 事が出来るような配置	-	姿を見る（演者としての他者）
	解放感	自己以外の他者は 存在しない	-	-
ネガティブ	不快感	他者に自己が見られて いるような配置	向かい合う 囲む 並ぶ	見られている（演者としての自分）
	疎外感	自己が他者を眺め、 比較する事が出来る ような配置	向かい合う 囲む 並ぶ	姿を見る（演者としての他者）
	気味悪さ	自己以外の他者は 存在しない	-	-

表-6 グループインタビュー調査概要

日時	2020.11.12~2020.12.15 計6回 各回60-90分程度
被験者	景観・デザイン研究室以外の社会環境工学科の学生計19名
方法	「普段の社会的な関係から解放されて、ひとりでゆっくりとした時間を過ごすことができる屋外の場合」についてその場所の詳細やする事、心情のきっかけと考えられる事を中心に説明してもらう。また、状況を想像しやすいように写真を用いて説明した。

地元の道路あるんだけど、<u>広い道路。歩道もめっちゃめっちゃ広い。</u> 場所 空間構成 場所 空間構成 片側車線くらいある道幅の歩道がある。で、<u>桜並木なのね。</u>でも 空間構成 場所 要素-自律 <u>全然人が歩いていないし</u>何ならたまに<u>ひとりで歩道を占領できる感じで。</u> 人存在 人存在 <u>前も後ろも人いないみたいなの。</u>なんか<u>そこを歩いたらジョギングしたりとかは</u> 人存在 人存在 自分のする事 <u>するんだけど、人いないし、</u>車も全然通らないし、 自分のする事 人存在 <u>木めっちゃ並んでいる感じでそれは落ち着く場所だと思って。</u> 要素-密度 心情
--

図-3 テキスト分析例

(3) 居方に注目した考察

鈴木毅¹⁹⁾はある場所に人がどの様な姿勢で、及び、どのような関係を他者や社会、環境との間に築きながら都市空間の中に居る事が出来るのか、という人と都市空間の関係性を示す概念として居方という概念を提示している。その中でも他者との関係性に着目した居方のタイプを図-2に示す。この鈴木による居方の分類を参考に、本研究で抽出された表-3、及び表-4に示す「都市でひとりになる場面」の心情のうち、きっかけの要因として「他者」に分類されている心情が引き起こされるような、自己と他者の配置について考察した。これを表-5に示す。

以上より知人と一緒にいるわけではない状態で更に、自分はひとりで居ると感じられるとき、その主体の心情には他者や周囲の環境が関与しているという事が明らかになった。

4. 都市でひとりになる居場所の実態把握

(1) 調査概要

そこでの心情として表-3の分類における「休息」が当てはまると考えられるような都市でひとりにな

表-7 指摘対象の分類

ID	指摘対象	例
a-1	自体	子供たち / ランナーもいる
a-2	密度	人はまあまあいる / 全然ガラガラじゃない
a-3	人	様子 一人じゃない人とかもまあまあいる / 子供とかが遊んでいる
a-4	行為	人の生活 / 人が動いていたり働いていたり
a-5	存在	人気がある方が / めっちゃがらんとしているわけじゃなくて
b-1	自体	街路樹があったりして / お店がある
b-2	密度	いっぱいビルが建っている / 木がめっちゃ並んでいる感じで
b-3	要素	様子 川も流動的な感じで / あそこなんか煉瓦造りになっているんだよ、線路のところが
b-4	音	葉っぱがざわざわするとか
c	空間構成	なんとなく山に囲われている感じで / 階段があって段になっているところがあって
d	時間	夕暮れの / 昼間じゃなくて
e	位置	住んでいる場所と地理的に離れているから / 地元の

表-8 印象・評価の分類

印象・評価	例
新鮮さ・非日常感	生活と切り離された感があって / 新鮮だったというか
安心感・穏やかさ	なんていうのかわからないけど、穏やかな感じになる
都市的な雰囲気	いい感じの夜景に見えるかなと思って / ちょっとおしゃべりしたりとか
なじみ感	自分のバックグラウンド的にもずっといた場所なので / 過去の思い出を思い出しつつ
開放感・眺望性	景色開けていていいな / 見通しが良いから
ゆったりとした雰囲気	ゆったりとした感じの場の雰囲気 / ゆったりした時間を感じる
直接的評価	きれいだな / かわいいなあ、みたいな感じに思っ
その他	人がいても干渉されない感じ

る居場所の特徴を把握する為に実際に都市でひとりになる居場所として選ばれている場所とその場所が居場所となっている理由を整理する必要がある。したがって都市でひとりになる居場所の事例を収集する為のグループインタビューを実施した。この概要を表-6に示す。被験者に自身の経験談を語ってもらう際は、その場所の様子、自身がしていた事、居心地良さの理由について語ってもらうことを意識した。

(2) データの分析

a) 都市でひとりになる居場所の特徴の把握

グループインタビューの際に録音した会話データを書き起こし、そこから1つの場所に関する話を1つの話題として切り出した後、その意味に注目して読み直し、被験者が都市でひとりになる居場所として語った、その場所の居心地が良い理由に関わる発言を抽出した。分析過程の一例を図-3に示す。その結果に対し、被験者が都市でひとりになる居場所について語る際の指摘対象の分類と、指摘対象及び都市でひとりになる居場所に対する印象・評価の分類を行った。この結果得られた指摘対象の分類を表-7に、印象・評価の分類を表-8に示す。

印象・評価の分類は、普段の生活との乖離や非日常を感じる事が居心地の良さに影響していると考えられる「新鮮さ・非日常感」、安心感や穏やかな雰囲気に関わる「安心感・穏やかさ」、都市特有の風景に価値を見出して評価している「都市的な雰囲気」、自身のこれまでの人生の中で、その場所に対して抱いてきた印象が居心地の良さにつながっていると考えられる「なじみ感」、眺望性の良さが居心地の良さに影響していると考えられる「開放感」、

主に単独の人や要素に対する印象や評価として発言された「印象・評価」に分類された。

b) 都市でひとりになる居場所の分類

表-8 の印象・評価を参考に、得られた 39 の都市でひとりになる居場所をその性質によって 8 つのタイプに分類した。なお、2 つ以上の性質を持つものは重複して分類している。これを表-9 に示す。

5. 都市でひとりになる居場所の本質観取

(1) 本質観取を参考にしたインタビュー調査概要

表-9 での都市でひとりになる居場所の分類のうち、他者の存在が感じられているものと非日常を感じる居場所についてさらに調査することで本研究の目的である都市でひとりになる居場所の本質的な意味の一部を明らかにする。本章ではそこで過ごす主体の心情の変化に注目し、他者及び非日常を感じるものの主体にとって持つ意味を明らかにする。この調査の概要を表-10 に示す。

(2) 得られた結果

a) 都市でひとりになる居場所で意識される他者の本質 他者の役割

表-9 都市でひとりになる居場所の分類

都市でひとりになる居場所の分類	上段：説明 下段：選ばれた居場所(度数)
他者の気配による安心感のある居場所	知らない他者が居ることで安心感が感じられている場所 川沿い(2) 公園(2) オフィスビルの中庭(1) 大学の中庭(1)
他者の様子を見る居場所	他者自体やその行動を見ることでくつろいだ気分になれる居場所 公園(5) 屋上・高台(3) 駅前広場(1)
他者がいない居場所	他者がいないことで解放感などからくつろいだ気分になれる居場所 川沿い(4) 自然環境(2) 地元の道(2)
都市的な雰囲気のある居場所	様々な要素により都市的な雰囲気が感じられている居場所 特定の都市全体(2) 川沿い(2) 駅前広場(1)
ゆったりした雰囲気のある居場所	緑や川があることや人工物が見えない事でゆったりとした雰囲気が感じられている居場所 自然環境(1) 川沿い(1) 駅前広場(1)
眺望の良い居場所	見晴らしの良さや開放感によりくつろいだ気分になれる居場所 屋上・高台(1) 川沿い(1) 地元の道(1)
なじみ感のある居場所	昔から訪れていた日常に行くなじみのある居場所 地元の道(3) 公園(2) 特定の都市全体(2)
非日常を感じる居場所	何らかの理由により非日常が感じられてくつろいだ気分になれる居場所 公園(2) 特定の都市全体(1)
その他の居場所	街路樹やベンチなどの要素がそこでのくつろいだ気分の理由となる居場所 川沿い(5) 特定の都市全体(3) 公園(1)

表-10 本質観取を参考にした調査概要

日時	2020.12.22 13:00-15:00及び2021.1.8 10:00-12:00の2日に渡って実施
被験者	景観・デザイン研究室以外の社会環境工学科の学生5名
方法	主題（本研究では都市でひとりになる居場所において他者の存在を感じること、及び非日常を感じることに）に関わる実際の経験を参加者各々が話し合う。 経験談における主題の意味を確かめ合い、その意味に着目してグループに分類した。 各グループ内の事例における主題の意味について共通し、かつ核心に関わると考えられる事柄を言葉で特定した。 上記の事柄を通して主題が持つ意味、すなわち、「都市でひとりになる居場所」において、他者を感じること、及び非日常性を感じることが自分たちにとってどのような意味を持つのかを話し合いの中で明らかにした。

他者の存在がその居心地良さに影響する都市でひとりになる居場所の事例として計 16 のエピソードが得られ、得られたエピソードをその中で他者が持つ役割によって分類したところ、他者が持つ 5 種類の役割が得られた。これを表-11 に示す。

他者を感じる意味

更にこのように見知らぬ他者と都市で直接的でない交流をすることの意味として 3 つの意味が考えられた。以下でこの 3 つの意味について説明する。

① 自己承認

他者の役割のうち「自己投影の対象」や「共感の対象」では、他者の姿や行動を見ることで自分と同様の心情や想いを抱く他者が存在すると想像して他者に共感するとともに、自分の心情や想いを肯定的に受け入れるという自己承認につながっている。

② 現実忘却

他者の役割のうち「自己投影の対象」「観察対象」では、意識の方向が自分の事ではなく他者に向かう事で、現実の煩わしさを一時的に忘却できるという役割が明らかになった。

③ ひとりだけど孤独じゃない

他者の持つ役割のうち「都市の日常風景」「現実感」は、知人から離れてひとりになっているが、孤独を感じさせないという意味を持つ。普段の人間関係から離れてひとりになりたい時でも、完全に周囲

表-11 都市でひとりになる居場所における他者の役割

他者の役割	説明、例
自己投影の対象	全く知らない他者に過去の自分を重ね合わせて懐かしく感じたりすることで、普段の生活から解放されているように感じる事が出来る。 例：自分の母校近くを散歩している時に、全然知らない子だけと後輩にあたる生徒を見て、懐かしくなるし落ち着く。
共感の対象	自分は一人で行動しているが知らない他者との共通点を見出すことで疑似的にコミュニケーションが取れたような安心感を覚えたりほっとする。 例：夜、橋を渡っている時に、景色がきれいだったので、立ち止まって眺めたり写真を撮ったりしていたら、ほかにも同じような行動をしている人がいて、一緒に話したわけではないけど、気持ちを共有できたようで嬉しかったし、ほっこりした気持ちになった。
都市の日常風景	実際に他者の姿は見えない場合も含めて、他者の存在を感じる事で社会の動きを感じたり「いつもと同じ」ように思い、安心感を覚える対象という。 例：学校とか、自分にゆかりのある場所に人がたくさんいると嬉しい。
現実感	他者の存在がある事で自分が今いる場所がリアルであり、夢などではないという事を確かめる事が出来るような安心感を覚える。 例：川の遊歩道でも川沿いに家とかビルとかがある感じ。（この方が安心する）他人は見えなくてもいいけど人気を感じる。
観察対象	観察したりその内面を考えると、意識を全的に他者に向けることで、自己に対する意識が薄れ、ゆったり過ごせる。 例：ちょっと高い所とか見渡せるところで、人の流れを見たりする。いろんな人いるな一般的、無心になれる。

表-12 都市でひとりになる居場所で感じる非日常のきっかけ

非日常のきっかけ	説明、具体例
季節性	季節の移ろいが草木やその季節限定のものによって感じられる事で、普段の日常からの変化が感じられてリフレッシュできるようなきっかけとなること。 例：近所の大通りで春になると桜並木みたいになる。短期間のものでからちょっとした特別感がある。非日常を感じる。心が温まる。
普段は行かない身近な場所	自宅や学校の周辺のように日常的な場所の周辺でありながら普段は立ち入らないような場所に立ち入ること、普段との違いを感じてリフレッシュできるようなきっかけとなること。 例：散歩道、一本奥に入ったところ、人通りも少なく手落ち着く、でもあまり通る機会が無いから非日常を感じ。
異空間性	その場所の雰囲気によって周囲の喧騒や普段の日常から離れているように感じられ、リフレッシュできるようなきっかけとなること。 例：街なかにある神社、お寺系、その一角だけ周りの喧騒から離れている。ちょっと神聖な感じがする。落ち着く。
日常的な場所から見た異空間	自宅や学校の周辺のように日常的な場所から日常的に行くわけではない異空間が見えることで、自分は日常の領域に居ながらにして異空間にいるような気分になること。 例：葛西臨海公園にいる時にディズニーランドが見えて満足した。リフレッシュできた。
新発見	既に行ったことある場所や普段からよく行く場所がいつもと違って感じたりするきっかけとなること。 例：荒川の橋を渡った時にすごく天気良くて空も川も真っ青で河川敷の芝が普段よりもやたら青々として見えて感動した。

に人がいない孤独のような状況は落ち着かない場所であり、他者はひとりでゆっくりできる場所に当たり前に存在するものとして捉えられている。

b) 都市でひとりになる居場所で意識される非日常の本質

非日常のきっかけ

都市でひとりになる居場所で非日常が感じられている事例として計 16 のエピソードが得られ、非日常を何によって感じるのかというきっかけによって分類したところ 5 種類のきっかけが得られた。これを表-12 に示す。

非日常を感じる意味

非日常を感じることは主体にとって何をもたらすのか、非日常のきっかけの分類後に話し合いの中で考察した。これを以下に示す。

① 幸福感

季節性を感じる居場所では日常の諸々を忘れさせるような、幸福感に満たされるという感覚があり、これが非日常を感じるの意味と考えられた。

② 好奇心・冒険心

普段は行かない身近な場所、及び新発見がきっかけとなる非日常を感じている居場所では、気持ちがそちら側に動くような「わくわくする」というような好奇心や冒険心に近いものが感じられており、これが非日常を感じる意味と考えられた。

③ 気分の離脱

異空間性、及び日常的な場所から見えた異空間によって非日常を感じている居場所では身体は日常的生活圏のそばにありながら、気分としてはそこから離脱して日常の諸々から離れているような感覚があり、これが非日常を感じるの意味と考えられた。

以上が都市でひとりになる居場所において本研究にて明らかになった他者及び非日常を感じることの主体にとって持つ意味である。他者を感じる 3 つの意味についてはいずれも知人ではなく見知らぬ他者と直接的でない関わりをする場面に限ったものであり、このような形で他者を感じることで、そこはかえって自分の事を考えたり気張らずに過ごすことができる場所となるということが明らかになった。非日常を感じる 3 つの意味については、主体が普段と違った場面を見ることで、気持ちを満たすような幸福感等の感情をもたらすという意味があることが明らかになった。

6. 結論

(1) 本研究のまとめ

本研究ではまず、都市に居てひとりを感じる場面をその時の心情によって表-3、表-4 のように分類した。これにより知人から離れてひとりで居る時は知らない他者の存在がその時の心情に影響することが明らかになった。次いで都市でひとりになる居場所として選ばれている場所とその理由を表-8 のように分類して都市でひとりになる居場所の特徴を把握した。

これにより、都市でひとりになる居場所における居心地にはそこで意識される他者と非日常性が重要であると考察した。最後に、フッサー現象の本質観取の方法を参照しながら、都市でひとりになる居場所において他者及び非日常を感じるものの意味を明らかにした。

(2) 今後の展望

都市でひとりになる居場所の選定やそこでの心情、及びその理由に関しては年齢等の属性によるばらつきが大きいと考えられるため、他の属性の人々を被験者とした調査を行う事でより広く実態を把握することができ継続的な調査によって、屋外空間の価値の一つとして都市でひとりになり、自分と向き合うための場所としての価値を高めることができると考えられる。

参考文献

- 1) 藤竹暁：『居場所を考える』、現代のエスプリ別冊「現代人の居場所」、至文堂、pp. 47-57, 2000
- 2) 石本雄真：こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感、自己有用間の関連から—、カウンセリング研究 43 巻 1 号、pp. 72-78, 2010
- 3) レイ・オルデンバーク、忠平美幸：サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」、みすず書房、2013
- 4) マギーズ東京について、<https://maggiestokyo.org/>、(最終閲覧日:2020 年 11 月 20 日)
- 5) 林田大作、舟橋國男、鈴木毅、木多道宏：「場所」の様態表現に関する基礎的分析—都市生活者の「居心地の良い場所」に見る人間—環境関係の研究—、日本建築学会計画系論文集第 579 号、pp. 45-52, 2004
- 6) 泊真児、吉田富二雄：プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係、社会心理学研究第 15 巻第 2 号、pp. 77-89, 1999
- 7) 高山範理、香川隆英：注意回復理論を用いた回復環境としての森林環境の機能に関する研究、ランドスケープ研究 76 巻 5 号、pp. 539-542, 2013
- 8) 南後由和：ひとり空間の都市論、ちくま新書、2018
- 9) 山田崇史、森口元貴：大学生のストレス解消に利用されるサードプレイスに関する研究—郊外型キャンパスに通う学生を対象として—、日本都市計画学会都市計画論文集 Vol. 53, No. 4, pp. 1215-1222, 2018
- 10) 林田大作、舟橋國男、木多道宏：環境以降に伴う職場周囲の場所構築の変容に関する研究：神田から品川への職場移行をケーススタディとして、日本建築学会計画系論文集第 579 号、pp. 67-74, 2014
- 11) 田中康裕、鈴木毅：「親と子の談話室・とぼす」の開設プロセスにみる「場の許容性」についての一考察—「場所の主」へのインタビューを通して—、日本建築学会計画系論文集第 579 号第 74 巻第 636 号、pp. 379-386, 2009
- 12) 畑倫子：回復環境の選択—パーソナリティ、コミュニティ意識、ストレスの影響について—、環境心理学研究第 7 巻第 1 号、pp. 1-11, 2019
- 13) 李威儀、鈴木毅、高橋鷹志：台北龍山寺と周辺地域における居方・コミュニケーションの質の考察—都市空間のなかの居場所に関する研究 その 1—、日本建築学会計画系論文集第 468 号、pp. 133-141, 1995
- 14) 小林健治、鈴木毅、舟橋國男、木多道宏、李斌：パブリックオープンスペースの設計コンセプトにみる人間—環境関係に関する研究、日本建築学会計画系論文集第 578 号、pp. 71-76, 2004
- 15) クレア・クーバー・マーカス、キャロライン・フランシス、湯川利和、湯川聰子：人間のための屋外環境デザイン—オープンスペース設計のためのデザイン・ガイドライン—、鹿島出版会、1993
- 16) 鈴木毅：人の「居方」からの環境デザイン、建築技術、pp. 204-207, 1993. 7
- 17) 海野裕子：大学生は「ひとりの時間」をどう捉えるか—自由記述の分析を中心とした検討—、昭和女子大学大学院生活機構研究紀要 vol. 16-2, pp. 99-109, 2007
- 18) 西研：哲学は対話する：プラトン、フッサーの〈共通理解をつくる方法〉、筑摩選書、2019